

勤労観、職業観を育む場で、思考力から始まり、 社会人基礎力全体を高めていく 汎用性の高いモデル

NPO法人南大阪地域大学コンソーシアム（以下、「南大阪コンソーシアム」）では、コンソーシアムとして、協力企業と教員の間に立つ教育コーディネーター兼教員の授業実施アシスタントを養成・確保し、その上で、キャリア教育に関するプログラムを独自に作成し提供して、小学校から大学に至るキャリア教育を、それぞれの学校が主体的に実践できるように、さまざまな形のサポートを行っています。

ここでのキャリア教育は、勤労観、職業観だけを育てるプログラムではなく、社会人基礎力を中心としたキャリア教育で求められる能力を育てることに主眼を置きます。

企業からの課題（ミッション）に対してグループで企画・提案をする、というシンプルなプログラムを作り、それを企業の協力を得て、学校で3カ月から1年をかけて実践していきます。グループで企画を立てていく過程で、協働する意味、楽しさなどを知り、それ

が勤労意欲や労働観などを育みます。しかし、このプログラムの育成の柱は能力であり、社会で生きていくのに必要な力を付けることで、いろいろなキャリアが開かれてくると考えています。

そして、その能力の中心的スキルを「思考リテラシー」としたところに特徴があります。汎用性のある思考の仕方を身に付ければ、「考え抜く力」はもちろんのこと、「前に踏み出す力」も「チームで働く力」もすべて向上していくという考え方なのです。

社会人基礎力は後からついて来ればよい

南大阪コンソーシアムのプログラムは、「社会人基礎力」の育成を柱にしつつも、「社会人基礎力」を意識させて教えようというのではなく、結果として「社会人基礎力」が身に付くプログラムです。

特に学習者が小中学生の場合は、言語や意義による意識化は難しく、また効果も定かではありません。能力が彼らの中で開発されたとき初めて自分がその力を持っていることに気付けばよい、また気付かなくても指導者が能力を発揮させてあげることが重要だと考えています。

そのためには、指導する側が「社会人基礎力」育成をしつかり意識する必要があります。指導者は意識的に言葉かけを行い、子どもたちを発揮に導くのです。指導者には、「このプログラムにはこういう意図があるからここを意識してください」と事前に伝えておきます。プログラムで育成する力を明示している上、毎時間の指導案にも育成する力を掲載し

「思考リテラシーって何?」

(大学生向け「実践力のある地域人材の輩出プロジェクト
~こんな関空ほしかってんプログラム」テキストより抜粋)

●人は、目の前に何か問題が発生すると、課題解決という「目的」に向かって、「思考し」→考えたことを「伝え」→それを「評価する」という一連の流れから、評価の結果を次なる「思考」へと改善させていくことを繰り返し最終的に目的である課題を解決します。この思考の一連の流れは、経営学でよく言われるマネジメントサイクルの1つである、「計画(plan)、実行(do)、評価(check)、改善(act)」のプロセスを順に実施する「PDCAサイクル(Plan - Do - Check - Action)」の形になっています。私たちは、この課題解決に向けて思考を体系化していく力を、「思考リテラシー」と名付け、人が社会の中で力強く生きていくために必要な力として位置づけ、重要視しています。思考リテラシーは、PDCAサイクルが組み込まれた思考のお作法とも言えます。思考のお作法が分かれば、考えるようにと言われてどうすればよいか分からなかった人も、思考の流れをたどって課題を解決することができるようになります。

資料提供 南大阪地域大学コンソーシアム

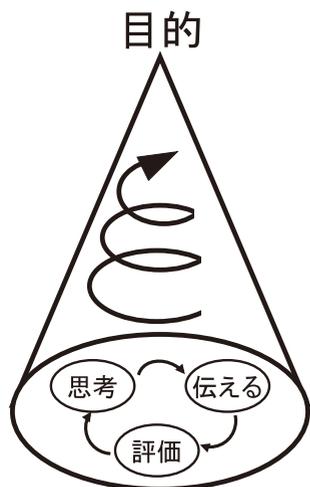
どのように問題を解決してよいかわからなければ、行動はできません。しかし、「思考リテラシー」を持つていけば、何か問題にぶつかったとき、自分ならどうするかを自分の問題として考えられる、自分の問題として解決していこうと主体的に問題に挑むことができます。これは、「前に踏み出す力」に当たります。もちろん、「思考リテラシー」自体が「考え抜く力」でもありません。

そしてユニークなのは、「思考リテラシー」は、思考がさらに深まったり、改善されたりするために、他者の評価を求めるところです。

思考というものは自分の内側にある考えですが、それを自分の外に出し、表現して初めて「思考した」と言えます。外への出し方は、自分自身への問いかけ、例えば紙に書いてみるということでもよいのですが、効果的なのは、他者に発信することです。なぜなら、評価が大事だからです。

評価は、評価する他者の思考、知識、経験などを反映します。ですから、評価を受けてさらに考えるときには、他者の思考、知識、経験を付加することになります。また、他者の評価には、自分の考えとの落差があります。この落差が大きければ大きいほど、それを埋めるために思考が深まります。したがって思考を深めるには、自分自身との対話より、他

「思考リテラシー」モデル



図版提供 南大阪地域大学コンソーシアム

深まっていくこの一連のスパイラル的な思考過程を「思考リテラシー」と言います。

このプログラムは「思考リテラシー」を獲得するプログラムであり、「思考リテラシー」を育成していく中で、「社会人基礎力」が自然に育つと考えています。

「思考リテラシー」は、思考だけではなく、行動する力を生み出すスキルでもあります。

であるので、教員は意識して指導に当たることができます。

ただし、学習者が大学生の場合は、最初に「社会人基礎力」の概念や意味を伝えることが、意識的な発揮を促す意味で一定の効果があると考えています。「社会人基礎力」の言葉はわかりやすいので、プログラムが何を育てようとしているのかを理解しやすくなるのです。

「思考リテラシー」の獲得が社会人基礎力の育成

南大阪コンソーシアムの「社会人基礎力」の中心をなすものは「思考リテラシー」です。問題にぶつかったり課題を与えられたりしたとき、その解決という目標に向かって思考を働かせ、それを他者に伝え評価を受け、その評価をもとに改善を求めてより深く考える、という繰り返しによって、よい解決策を生み出す。思考が他人からの評価によってさらに深まっていくこの一連のスパイラル的な思考過程を「思考リテラシー」と言います。

者との対話の方が効果的なのです。

つまり、思考の発揮には他者の存在が有効であり、「思考リテラシー」の育成過程にも他者が必要になります。そして、他者に評価を求める過程は、「発信力」「傾聴力」「柔軟性」など（これらは「チームで働く力」に含まれる）が求められる過程なのです。

このように、「思考リテラシー」を育成、発揮することは、「社会人基礎力」の「3つの力」を育成、発揮することになるのです。

基本のプログラムは問題解決型、そのポイントは二つ

南大阪コンソーシアムの基本のプログラムは、企業から児童、生徒、学生がミッションを受け、その実現に向けて、グループで問題を探り（徹底分析）、アイデアを練り（企画書作り）、提案と修正を何度か繰り返し（ブラッシュアップ）、最終的に解決策を固め、企業にパワーポイントでプレゼンテーションする（審査会）という問題解決型のプログラムです。

このプログラムのポイントは二つあります。一つは目標を明確化しその達成過程を重視すること、もう一つは、実社会の現実を学校の場合に取り入れる意識が高いことです。

狙いその1 目標を明確にし、目標達成を大事にする

このプログラムでは、目標を明確にすることを重視します。そこには、二つの側面があります。一つは、指導者の側が、育成する能力の目標を明確にすること、もう一つは、学習者が活動で目指す目標を明確に知ることです。

例えば、小学校向けの「こんな自転車ほしかってん」プログラムでは、最初に自転車メーカーの人が小学校を訪れ、自転車の企画をするようミッションを出します。目標は、どのような人を対象にどのような自転車を作るか、を考えることです。

教育者にとっての目標は、このプログラムで子ども達にどんな力を付けたいか、どんな子どもに育てたいかということです。教員は事前に明確にそれを意識して、指導をすることが重要です。南大阪コンソーシアムではコーディネーターとして、教員側とその点について、事前に十分に議論し、共通の目標を持って取り組むようにしています。

一方、このプログラムでは、目標達成を重視し、そのことを学習者に強調します。小中学校では、一生懸命取り組めればそれでいい、よく頑張ったね、で終わらせてしまうこともありますが、このプログラムでは、一生懸命やっても目標を達成しなければいけない、どんなに迂回してもよいから目標にたどり着きなさいと指導します。また、指導者は学習者に常に目標達成を意識させます。なぜなら、「ただの作業としてカリキュラムに取り組む」と、目標を意識して目標達成のための過程として作業をすることは、全く異なる（南大阪コンソーシアム『キャリア教育プロジェクト』冊子）と考えるからです。目標達成を意識することが、能力を高めることにつながるからです。

こうした狙いを実現するために、指導者は、最終目標だけでなく毎時間ごとの到達目標を、学習者に明確に示します。学習者にとって見通しが利くことは重要なことで、見通しが利けば次に何をすればよいか、やるべきことが見えてきます。自分で考えて行動する、

プランを立てるといったことができるようになり、その能力が付くのです。学校の通常授業でも、教員は単元ごと・時間ごとの目標を設定していますが、子どもには見えないし、伝わっていないようです。大事なものは、目標を常に意識させること、目標を達成していくことを重視し、その姿勢を示すことです。それが教育効果を高めることになるのです。

◆ポイント 目標が明確

- ・学習者にとって目指す目標が明確
- ・指導者、育成者にとって目指す目標が明確

狙いその2 社会の現実を学校へ持ち込む

現代は、情報は豊富でもテレビ・ネットなどバーチャルなものが多く、子どもの生活は実社会との接点が薄れ、本来なら社会の中で育てられるはずの「社会人基礎力」が育ちにくい、と言われています。このプログラムでは、さまざまな狙いと工夫を持って社会の現実を少しでも学校の中に持ち込もうとしています。

■テーマ設定

ミッションをモノやサービスの企画提案にしたのには、次のような狙いがあります。

一つは、モノやサービスには、作る人の情熱や夢など思いが入っています。また、情報収集や現状分析、論理的思考などがあって実現しています。そうしたことを学ばせたいという狙いです。

二つ目は、モノやサービスを作ることは、人を知ることになります。人とモノの関係、人と社会との関係から、モノやサービスが生まれていることを知ることになります。

例えば、「こんな自転車はしかってん」プログラムでは、お年寄りにやさしい自転車を作ろうとしました。「でも、お年寄りって?」。子ども達は思い込みや曖昧な概念でお年寄りを捉えていたことに、企画が行き詰まったときに初めて気付きました。また、自転車だけではなく、「なんで自転車が放つてあるんやろ」と放置自転車が気になり、「自転車が走りやすい道ってなんやろ」と道路作りや町作りが気になり始めました。情報収集や観察を通して、人や社会への視野が広がったのです。

■「ミッション」が現実のもの

新しい自転車を作ろうというミッションは、自分だけが満足するものを作ればいいというものではありません。企業のミッションですから、他人に受け入れられ、人の役に立つことが求められます。

この「他人に受け入れられる」「人の役に立っている」という実感が、自己効能感を高めます。企画・提案を通して、社会に役立つための「自分の生かし方」を学び、仕事は社会に役立つことだということも知ります。

加えて、ミッション達成に向けた手法も、現実のものが取り入れられます。現状分析、情報収集、プレゼンテーション、チームでの協働。特に育成に力を入れているのは、現状

把握・現状分析から課題解決に至るプロセスと、具体的な分析法や提案法です。これらは、実際会社で取られている手法ですが、この手法を活用できるようにすることは、将来だけでなく、今自分の周りで起きている課題を解決するのに有効な手法です。これは思考を深める手段としても重要です。

■現実の社会を知る

このプログラムでは、一度企画を固めて中間発表させますが、そのときあえて、その企画を壊します。ブラッシュアップの機会を与えるためです。現実社会では、企画が一回で通ることはありません。同僚、上司、クライアントなどに叩かれて、ブラッシュアップされてよいものになります。その現実を体験させます。そして、それがさらなる能力の発揮を促すこととなります。

これは企業や指導側の期待の表れでもあります。子どものやることだからとレベルを下げたり手を抜いたりしない、その本気さが子どもに伝わります。期待をかけられることが高い教育効果を生むことは言うまでもありません。

審査会、相互評価、順位付けもあります。最終審査会では、企業の人から評価を受けます。皆さんよくできました、とはしません。実社会では、全部の企画が採用されることはありません。現実社会では評価が大事であることを教えるのです。

■リアルな企業の人との接点

「こんな自転車ほしかってん」プログラムでは、導入の際に、日本チャンピオンのレーサーが自転車に乗って登場しました。協力企業のレーサーです。自転車も数台持って来て、子ども達に触れさせました。導入では、モチベーションを上げるために、企業の人との接点を設け、ホンモノに接することを大事にします。

また、学習者は企業の人が見てくれることに期待感を抱きます。いつも接している先生ではなく、プロの人に評価されるインパクトはとても大きいのです。プロの人に承認されることで、企画作りの価値が高まり、やってきたことに意味が持てるようになります。

◆ポイント 現実の社会を取り入れる

- ・テーマが現実のもの
- ・モノ作りは夢や希望、モノ作りは人や社会との関係
- ・ミッションが現実のもの
- ・人の役に立つことが仕事、手法も現実のもの
- ・現実社会を知る
- ・評価される、ブラッシュアップ、レベルを下げない、高い期待
- ・リアルな企業の人との接点
- ・プロの人が見てくれる期待感（先生ではなく、プロの人に評価されるインパクト）

■「なんでやねん！」の繰り返しで思考を深める

小学校向けの「こんな自転車ほしかってん」プログラムをもとに、「思考リテラシー」の獲得を目指した授業の進め方を紹介します。

このプログラムは、基本は1年間で30時間。学校の授業の「総合的な学習の時間」などを利用して、2時間続き×15回で組み入れます（半分の時間で行うこともあります）。

徹底分析

まず、企業からミッションをもらう際に、商品の特色、歴史や将来性、抱えている問題などの情報の提供も受けます。それらも含めて、企画をする前に商品をいろいろな角度から分析します。ふだん見慣れて知っているつもり自転車で、見えていないことは多いのです。「知っている」と「理解している」が違うことを伝えるのです。

ここで活用するのが、「徹底分析シート」です。「思考リテラシー」の獲得に、難しい訓練や長い時間が必要だと、小・中学校ではなかなか導入できません。しかし、これほどシンプルなシートです。

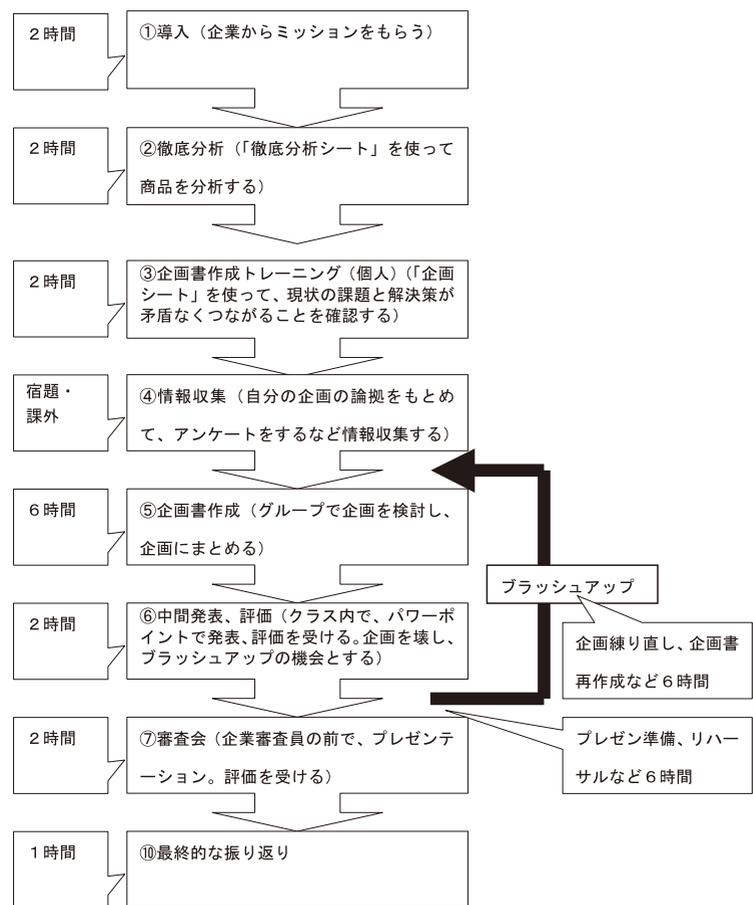
「自転車ってどんなもの？」「自転車のライバルは？」「町や社会にとっての影響は？」「自転車のよい点、不利な点は？」。自転車をさまざまな側面から見て、1枚のシート上に可視化させます。特にモノと人、モノと社会のつながりをどれだけ分析できたかは、課題解決の導入、企画のアイデアにつながるので重要です。このシートは、ビジネススクールの手法や経営学の考え方などをもとに開発したもので、学習者に応じてわかりやすい言葉に置き換えます。

企画書作成トレーニング

ここでは「企画シート」を活用します。企画を具体化するために、解決までに考えなければいけない要素と順番を1枚のシートに表したのがポイントです。①現状の課題、②影響・結果、③背景・原因、④要望・提案、⑤狙い、⑥ターゲット、⑦解決策、⑧その工夫、⑨成果の9項目について、整合性が取れているか一覧できるよう配置も工夫しており、論証が矛盾していないかを確認することができます。

学習者は、徹底分析から出てきたアイデアの切り口が解決策になるかどうか、このシートで整理していきます。

プログラムの流れ



※時間はおおよそ

資料提供 南大阪地域大学コンソーシアム

情報収集

思いつきと提案は違う、提案には論拠が必要で、そのためには情報が必要だということ
を伝え、情報収集に当たられます。自転車博物館へ行くこともありました。生の声を集め
る大事さを指導し、宿題として、家の人や町の人に聞いておいで、ということもしました。
これは、まさにマーケティングリサーチです。別プログラムの町作りでは、町歩きなどフ
ールドワークさせることもありました。

企画が通るためには論拠の妥当性や正当性が重要で、論拠を示すことを「思考リテラシ
ー」では重視します。そこで論拠を求めることが習慣化するよう指導します。論拠を求め
るとは、大阪弁で言えば「なんでやねん?」。子ども達は、他の教科の時間でも、なんで
やねん、なんでやねんと、その論拠を求めるようになるのだそうです。

企画書作成

情報収集までは個人作業として行います（最初に個人で作業させるのは、人の考えに引
つ張られたり、人任せにしないようにするため、まずはしっかり自分の考えを持たせる
ことを重視するのです）が、その後、企画の方向性の似ている子同士でグループを作り、
書いたシートを持ち寄り、検討に入ります。自分の考えた企画のよさをメンバーにきちん
と説明させ、多数決でなく一番よいと思うものを選ぶべく議論させます。皆のアイデアを
寄せ集めると企画の狙いが崩れるといった、企画のポイントなども伝えます。

中間発表↓評価（クラス内）

このプログラムで特にこだわったのは、小学校ではやらない、評価とブラッシュアップ
の導入です。前述したように、評価とブラッシュアップは、実社会では当たり前であり、
作っては壊し、壊しては作る過程で思考が深まる、と考えられるからです。評価の緊張感、
真剣さも大事にしました。

ここは、コーディネーターの役割が大きいところです。ふだん先生に厳しく評価されて
いない小学生達を前に、徹底的に突っ込んで企画をいったんぶち壊すのです。「壊し」慣
れていない先生に代わって、ぶち壊すのです。もちろんどのように「壊す」ことがブラッ
シアップに必要なのか、学校の教員側と事前にコンセンサスを取って行います。

一方、子ども達の発表についても、単なる発表とプレゼンテーションは全く違うと教え
ます。発表では、調べたことや考えたことを一方的に伝えればよいのですが、プレゼンテ
ーションは自分の企画を採用してもらわなくてはいけないのでそうはいきません。単なる
報告ではなく説得力のあるプレゼンテーションにするためには、どんな流れで説明すれば
論理的になるのか、思考を訓練するシートなども用意します。

最終審査会

こうしてブラッシュアップされた企画は、最終審査会で審査されます。企業の人が審査
員です。授業参観などに組み込む場合もあります。

審査会では、企業の人から一班ごとに厳しくコメントをもらい評価を受けます。企業の人
からの質問にその場で答えていきますが、ここにくるまでチームで徹底的に企画を積み
上げてきたことを述べることは自信につながります。小学校ではあまりやらない順位付け

を教員と相談の上、できるだけ行うようにしています。実際、ほとんどの小中学校事例で実施しています。

発表後には、企業の人から、今回のプログラムでやったことは本当の企業でもやっていることだ、それを小学生がやるのは有意義なことだ、ここで身に付けた力は将来役に立つ力だ、と話してもらいます。子ども達は、自分達のやってきた活動が価値のあるものだとわかります。企業の人の言葉だからこそ、子ども達の中に残るのです。

■振り返り

プログラムの最終日に、1時間かけて振り返りを実施しました。活動をやりっぱなしにせず学んだことを定着させる意味で、振り返りは重要です。記憶が新しいうちに、活動について書かせたり、アンケートの形で自分にどんな力が付いたか成長を振り返らせたりします。

毎時間の授業の最後にも、その日の活動振り返りは行いました。最初は、楽しかった、という感想だけですが、だんだん、次に何をしたらよいか、何をすべきか、といった考察が増えていきます。次への課題が見えるようになってくるのです。

そして、プログラム終了後には、「皆と協力できて、話し合ったりして、最後には舞台上がって皆に向かって発表できて、自信が持てるようになった」「いろいろなことに挑戦できるようになったし、自分のためになった」と自分の成長を書いています。また、「これからの生活にも役立つと思うので、ぜひこんな力を使っていこうと思っています」という能力発揮への意識が見られるコメントもありました。

■成果

一連の活動の効果は、教員からも聞かれます。例えば、全国学力・学習状況調査の「活用に関する問題（B問題）」の成績がよくなったという声がありました。論拠を求める姿勢は、他の教科にも表れたそうです。活動を終えて自信が付き、その後の活動にも主体性が見られるようになったと言います。一方、教員も、子ども達の多様な能力に気付かされ、能力の観点から子ども達を見られるようになったと言います。

■参加しやすいプログラムで、企業も地域貢献できる

このプログラムでは、最初にやることをきっちり決めてあり、協力企業の役割も明確にしてあるため、参加企業を募る際にも、企業の理解を得やすいものになっています。また、企業の側に準備させない、学校訪問回数は最低限に抑えるなど、企業の負担を増やさないようにしてあります。協力企業を募る登録システムも作られています。

企業がこのプログラムで担う最大の役割は、「ホンモノの社会人としての厳しい目線で」授業に臨んでもらうことです。企業の論理で、企業のやり方で学校に入り、子ども達の思考に対してホンキで向き合ってもらうことによって、子ども達の「思考リテラシー」は伸びるのです。

実際には、以下の3回（各2時間）の学校訪問を、最初にきちんとお願いしておきます。
・ミッションおよび商品説明…カリキュラム開始時に、直接（学校で）ミッションを伝え
てもらおう。実際の企業の活動や実際の商品を用いて、その工夫を説明してもらおう。

「職業ガイドブックを作ろう」プログラム

step	授業内容	つきたい能力	社会人基礎力
1	事前学習 企業人の講演 →講演内容をまとめ、情報整理をする →働くことをしっかり捉える (意義、やりがい、思いなど)	コミュニケーション能力 情報収集・探索能力 計画実行能力 選択能力 職業理解能力	主体性 課題発見力 計画力 創造力 傾聴力 柔軟性 状況把握力
2	徹底分析 ガイドブックに何をのせることがよいか、仕事について徹底分析する →仕事が自分たちとどのような関わり、影響があるのか考える	コミュニケーション能力 情報収集・探索能力 計画実行能力 選択能力 職業理解能力	主体性 働きかけ力 実行力 課題発見力 計画力 創造力 発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力
3	情報収集 分析やリサーチを行い、情報をまとめる →仕事について考えを深めていく	自他の理解能力 コミュニケーション能力 情報収集・探索能力 計画実行能力 選択能力 職業理解能力	主体性 働きかけ力 実行力 課題発見力 計画力 創造力 発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力
4	企画提案 どのような視点からガイドブックを作るか、内容はどのように構成していくのか考えていく	コミュニケーション能力 情報収集・探索能力 計画実行能力 選択能力 職業理解能力	主体性 働きかけ力 実行力 課題発見力 計画力 創造力 発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力
5	中間発表 企画をクラス内で発表し、厳しく評価し合う →評価をうけ、企画の練り直し	自他の理解能力 コミュニケーション能力 情報収集・探索能力 計画実行能力 課題解決能力 選択能力	主体性 働きかけ力 実行力 課題発見力 計画力 創造力 発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力
6	取材 働く人へのインタビュー	自他の理解能力 コミュニケーション能力 情報収集・探索能力 計画実行能力 課題解決能力 選択能力	主体性 働きかけ力 実行力 課題発見力 計画力 創造力 発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力 規律性
7	原稿執筆、編集 取材内容を、練り直した構成にあわせて文章化→編集、レイアウト、デザイン作業→最終チェック	コミュニケーション能力 計画実行能力 役割把握・認識能力	主体性 働きかけ力 実行力 課題発見力 計画力 創造力 発信力 傾聴力 柔軟性 状況把握力
8	完成 印刷、配布		
9	振り返り 活動を振り返り、記録→やってきたことに価値をつける	自他の理解能力 情報収集・探索能力 職業理解能力	主体性 課題発見力 創造力 発信力 傾聴力 柔軟性

※ステップ4までは、個人ワークが中心、以降グループワーク中心

※冊子は、自由に読めるよう一人に一冊ずつ持たせ、冊子作りの参考にさせる

資料提供 南大阪地域大学コンソーシアム

ただ中学校では、高校に向けた進路選択なども念頭に、より現実的なキャリア教育のニーズが出てくると思われます。中学生には、普通科高校に行くか、職業教育中心の高校に行くかの選択がすぐやってきます。普通科高校に進学してもすぐに文理コース分けの選択に迫られます。それらの選択は、将来の職業と大きく関わります。中学生は、自分の関心や適性を将来の仕事とつなげて考える入り口の時期でもあるのです。世の中にはどんな職業があり、その職業に就くにはどんな勉強や進路選択が必要かといった情報へのニーズも生まれます。

中学生には『やりがい・みちのりBOOK』を活用したキャリア教育も

南大阪コンソーシアムでは、キャリア教育といっても、勤労観・職業観育成に直接応えるタイプの実践には、あまり支援をしてきませんでした。社会人基礎力を育成しつつ、働くことへの関心を喚起するプログラムが中心でした。

・企画書チェック・途中段階で一度授業に参加してもらい、各グループにコメントをもらう。
・審査員・最後の審査会で審査して、講評してもらう。

このプログラムの枠組みはシンプルなので、どこの企業でも対応が可能です。とりわけ中小企業にとっては、若手社員が学習者を指導することが社員自身の人材育成にもなると、積極的に参加する企業も出てきています。企業は自社の製品の説明を、専門用語が通じない子どもの目線で、相手に分かるように、しかも限られた時間内で確実に伝えることが求められ、できるかどうか試される機会にもなります。

「こんな自転車ほしかってん」プログラムの協力企業である株式会社シマノは、堺市の地域の会社として地域への社会貢献としてキャリア教育に協力しています。地域の子も達が「考えることは楽しい」と気付き、「自分は何ができるのか」を常に考え、成長してくれることに協力することが、堺への恩返しであり、最大の社会貢献であると考えようになりました。

職場見学や職場体験を数日間行う学校も増えていきます。しかし、事前学習・事後活動などが充実していないため、せっかくの機会がただの体験で終わってしまうなど、想定するほどの効果が上がらないケースもあります。

これらのニーズや課題を背景に、南大阪コンソーシアムでは、直接的に仕事のことを考える方策として、仕事紹介のガイドブック作りを課題としたプログラムを考えました。冊子作りの過程を通してさまざまな仕事を知ることが、自分の進路を考える機会となります。職場体験をより有効にするための事前学習・事後活動として活用することもできます。「総合的な学習の時間」などに組み込み、じっくりと時間をかけて、勤労観・職業観を育成し、現在の学習への意欲付けも行い、かつ思考力など「社会人基礎力」を育成する総合的なキャリア教育プログラムを目指したのです。

そこで注目されたのが、経済産業省が発刊した『はたらく人のやりがい・みちのりBOOK』でした。これは、もの作りや企画・開発なども含めた企業の第一線で活躍する若い人たちを通して、中学生にもわかりやすいように多様な仕事を紹介されている冊子です。

やりがいにフォーカスが合っているので、勤労観・職業観育成としては有効に思われました。また、中学・高校時代の学習や進路選択についても語られています。この冊子で仕事のことを考えつつ、この冊子をモデルにして仕事紹介の冊子を作るプログラムとしたのです。

プログラムの基本的な枠組みは、前述した小学校のプログラム同様、「思考リテラシー」の獲得をベースとした課題解決型です。グループで、仕事紹介のガイドブック作りのミッションに向けてインタビュ取材などを行い、冊子作



経済産業省の作った中学生向けキャリア教育の副教材

りを行っていきます。

具体的には、まず導入として、企業人に講演をしてもらいます。ある中学校では、本に掲載されている対人地雷除去機のメーカーの担当者に依頼しました。本に載っている人が目の前でリアルに語ってくれることで、導入としてのインパクト効果も期待されますが、それよりも、事前に冊子を読み、かつ講演後、冊子のホームページ(※)でさらに詳しく調べることで、講演をより有効に活用することを狙いました。

これらをもとに、さらに仕事とは何かを分析し、本に載せる内容を検討しつつ、同時に仕事への考えを深めます。この過程で、「社会人基礎力」が育成されるとともに職業への関心が広がります。進路選びのヒントや学習への意欲付けにもつながります。これは、「総合的な学習の時間」における、中学生に有効なキャリア教育プログラムの一つのモデルであると思われます。

※『やりがい・みちのりBOOK』公式サイト「わくわくキャッチー」

(<http://www.wakuwaku-catch.jp/>)

●NPO南大阪地域大学コンソーシアム(大阪府堺市)

南大阪地域等の大学が連携し、地域の学術機能の向上と産官学地域連携の推進を目指して、学生主体の諸活動を行っている大学コンソーシアム。大学生へのキャリア教育、単位互換、インターシシップ事業などを行うとともに、地域や地元企業と連携し、地域の小中高等学校でのキャリア教育を実施している。連携大学は、大阪大谷大学(および短期大学部)、大阪芸術大学、大阪女子短期大学、大阪府立大学、大阪夕陽丘学園短期大学、清風情報工科学院、帝塚山学院大学、羽衣国際大学、プール学院大学(および短期大学部)、桃山学院大学、和歌山大学、近畿大学生物理工学部など21の大学、短大、専門学校。